

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 筆祭競介

挿絵 わしみゆーこ

序章	少年探偵と女怪盗の夜	006
第一章	囚われの少年探偵	013
第二章	欲しいものがあるならば、奪わなくてはいけないよ	043
第三章	虐められちゃう少年探偵	110
第四章	ツインテールの女怪盗とポニーテールの同級生	158
第五章	少年探偵おしおきハーレム	190
終章	解放された少年探偵	245

登場人物紹介

Characters



ひむら 火村 さやか／怪盗フレイア

赤毛のツインテールの怪盗。しなやかな身のこなしが特徴。その正体は学級委員長も務める智彦の同級生。

くちは わかば 朽破 若葉／怪盗ラブリーシャドー

元気いっぱい素直なロリっ娘。くノ一の末裔で、修行のために怪盗をしている。性には奥手。

あやの 綾乃／怪盗クイーンダイヤ

理知的な雰囲気漂わせる、ショートカットで鋭い目つきの美女。実は、智彦の通う学校の教師。

リオジーナ／怪盗レディパンサー

ラテン系の陽気なブラジル人女性。豹のようなコスチュームを身につけている。また、性には開放的。

エデル／怪盗キャプテンジュエル

代々怪盗を家業とする名門一族出身で、とてもプライドの高いお嬢様。金髪碧眼。ハイテク機器に強い。

きりがみね るいこ 霧ヶ峰 瑠衣子／怪盗ミステリアスバニー

露出度の高いバニーガールのようなコスチュームを着ている。天然ボケ系の性格で、豊富なバストが印象的な熟女。

せがわ ともひこ 瀬川 智彦

有名な少年探偵。度々女怪盗たちの盗みを阻止している。

クインダイヤの言葉に、一人だけ智彦捕獲に参加していなかった怪盗フレイアの肩がびくつと震えた。

「えっ!? わ、わたし?」それまで毅然としていたツインテールの声が裏返った。

「そうよ。あなた以外に他に誰がいました」と澄まし顔のキャプテンジュエル。

「ぱんつを又がして、ゴカイチョウよー」やはりレディパンサーはニコニコしている。

「止めて、止めてください!」智彦はそう言い続けていた。

「今まで散々、私たちのお宝奪取を邪魔してくれたお返しよ」

「さてさて、名探偵のお宝はいかに」

「フレイアちゃん、早くヌギヌギさせちゃいなさい」

これだけ他のメンバーに言われてしまつてはフレイアも従うしかなかったようだ。

開かれた智彦の股間に両膝をつくつと、かちやかちやと制服のズボンを脱がし始める。

『おおおおおおおっ!』

狭い監禁室に、女怪盗たちの競り上げるようななどよめきが響き渡つた。全員の視線がトランクスをズリ下げられ剥き出しになつた少年探偵の股間に集中する。開かれた股間には、歳相応に発達した陰毛をふさつと根元に生やした男性器が剥き出しになつている。この異様な状況のためなのか、ぐつたり力なく項垂れている男の象徴は、まるで肉色の大蛇のよなサイズと形状をしていた。二握りはありそうな全長に片手の指が回りきらない太さを

有している。その下に垂れている陰囊もかなり大振りで、この巨砲に相応しい実弾の豊富さを誇示していた。

「ふえ……ふえええ」

智彦はあまりの羞恥のために半泣き状態だ。物心ついてから男性器を年頃の異性に見られたのはこれが初めてである。しかも相手が敵である女怪盗六人だ。

「これ、勃起したらどこまで大きくなるんでしょうか」

優しげなルックスの少年探偵からは想像できなかった巨根に、啞然と見入っていた女怪盗たち。その中で最年少であろうラブリーシャドーがぼそつと呟いた。それまでは無邪気なイタズラをして楽しんでる風だった怪盗たちの表情が、その一言で、女の顔になる。「かなり気になるわね」

「フレイア、続きをしてよ」

唯一、智彦の股間から視線を逸らせている怪盗に、他の女怪盗たちの視線が向けられる。「えっ、ヤダ、冗談でしょ！」その言葉は、僅かに震えていた。

「何よあなた。さつきから一人だけいい子ぶって。メガネ猿の捕獲はここにいる全員が同意したことですわよ。今さら抜けることなんてできなくてよ」とキャプテンジュエル。

智彦を押さえ込んでいる女怪盗たち全員に、ツイントールの女怪盗が批判され始めた。

「フレイアさん、さつきからなんかカンジ悪いです」とラブリーシャドー。

「どっちのミタカかわからないネー」とレディパンサー。

「大体なんなのさつきから。坊やを庇ってばかりで」とクインダイヤ。

「ひょっとしてフレイアちゃんは、探偵くんのが好きなんじゃないの？」

最後に問われたミステリアスバニーの言葉に、フレイアのツインテールが逆立った。

「なになつな何を言うのよ、そんなことあるわけないでしょ！ ふん、わかつたわよ！
み、みみみみみ見てなさいよ！」

赤毛の女怪盗は智彦の股間をジッと見つめてから右手をそろそろと伸ばしてきた。そのまま伸ばした人差し指で、項垂れた男根をつんつんする。まるで智彦のペニスに危険なトランプが仕掛けられていないか確認するような慎重さだ。

「はくっ！」

智彦はフレイアの指の感触に反射的にうめいていた。自分の指に比べて明らかに細くしなやかなその感触に、フレイアが「女」であることを強烈に実感する。

——ま、まずいよお。これだけでおちんちんが起たつちやいそうだ。

これが男性器に対する異性の初接触だ。肉体的な快感と現在のシチュエーションが相乗効果を発揮し、男のスイツチが入ってしまった。しかも童貞の智彦にとつては、自分を押さえつけている怪盗たちの女性の感触も勃起を促進させる。自分の腹の上でその見るからに柔らかそうな真っ白い肉体をしなだれかけているミステリアスバニーの心地よい重

さ。太腿で挟むようにして両足を押さえつけているラブリーシャドーとレディパンサーのしなやかな股間の感触。両手を押さえつけているクイーンダイヤとキャプテンジュエルからは、汗なのか香水なのか区別できない、なんとも甘い香りが漂ってくる。

——やつ、やばいつ。起っちゃう。おちんちんが起っちゃうよお。

ぎこちないフレイアの手つきと女怪盗たちの肉体の感触、そして物心ついてから初めて異性に性器を触られたという事実が交錯し、とうとう智彦の中のスイッチがオンになってしまった。恥ずかしそうにしているフレイアの姿と他の女怪盗たちに男性器を見られている羞恥心が複雑に絡み合い、官能の血流を股間に向かわせる。

ぐいん、と項垂れていた男根が勢いよく頭をもたげた。

まさに目を覚ました大蛇のようである。

「わわっ!! うそっ!! えっ? ええっ!!」

フレイアは顔を真っ赤にして、意味を成さない言葉を吐いた。

「ほらほら、カマトトぶつてないでシコシコしなよ」

キャプテンジュエルの言葉に、フレイアが顔を横に向けたままその男根をむずつと掴む。目の前の光景にまともな判断力を奪われて、他の女怪盗たちの言うがままになっている。

——フ、フレイアもこういうの初めてなのかな……。

少年がそう考えた直後、赤毛の女怪盗がゆつくりとペニスを上下にさすり始めた。男根

を痛めないようにするためだろう、力加減が非常に緩い。しかしこの異様な状況が少年の感度をいつも以上に敏感にしていた。柔らかな少女の指がしつとりと絡みつき、自慰とはまるで違う快感が走る。自分の指ではないためその動きも予測できず、快感を耐えるのが難しい。フレイアの手の中でまだまだ半立ちだった肉棒が一気に限界まで膨れ上がった。わっわっわっ、と短い言葉を発しながらフレイアがペニスをこすり続ける。仮面をつけているのではつきりとした表情まではわからないが、男性器の反応に驚いていることは明らかだ。そして恥ずかしがっている。ツインテールの向こう側に見え隠れしている形の良い耳が真っ赤になっていた。その拙い指使いと恥ずかしそうな女怪盗の姿が、否応なく智彦の官能を刺激する。怪盗として対決する際の凜々しいフレイアとのギャップがたまらない。「こんな凄いの初めて見ただす」

片足を押さえているラブリーシャドーが、まじまじと智彦の巨根を見ている。

「やはり、ニッポンドンジはフトコロガタナをモつてるねー」

レディパンサーは、うんうんと頷いて何かに納得しているようだ。

「まだまだ子供のくせに、ココだけは立派な大人ねえ。主人よりも大人だわあ」

ミステリアスバニーが、自分の夫（？）と比べているような発言をした。

「メガネ猿のくせに、エッチなとこだけは進化しているよううね」

キャプテンジュエルは危ない色を瞳に浮かべている。

「探偵のクセにこんなところにお宝を隠していたなんて……」

食い入るようにペニスを見ているのはクインダイヤだ。

智彦の身体を押さえている五人の女怪盗たちは、程度の差こそあれ勃起した男根に十分免疫があるようだ。そして一人だけ、その言動からどう考えても男慣れしてなさそうなフレリアが、唯一そのペニスを責めている。異様な状況だった。股間を剥き出しにされ、全身を押さえつけられている少年探偵。智彦の身体を押さえつけ、興味津々でそそり立つ勃起を見ている五人の女怪盗。唯一少年探偵にイタズラすることに反対したにもかかわらず、なぜかペニスを手コキするハメになっている意外とウブな女怪盗フレリア。

——うわあ、なんか……なんか変な気分になってきたよお……。

見守る女怪盗たちの熱っぽい視線を強烈に感じ、智彦の官能と羞恥心がますます押し上げられていく。ぎこちないフレリアの指使いがそれに拍車をかける。少年の脚に股間を乗せているラブリーシャドーやレディパンサーが、腰を僅かにモジつかせているのもたまらなかつた。両手を固定しているクインダイヤとキャプテンジュエルは、少年の股間を食い入るように見つめながら、おそらく無意識にだろう、智彦の腕をぎゅつと握り締めている。

「もうちよつと強めに扱といてあげても大丈夫よ。今のフレリアちゃんの指使い、まるでおちんちんを焦らせてるみたいよ」

ミステリアスバニーの言葉に、ぎこちなく指を上下させていた赤髪の女怪盗は手の動きを止めた。それまでずっと顔を横向かせ明後日あさってのほうを見ていた視線を、恐る恐る智彦に向けてくる。少年探偵と怪盗フレイアは、数瞬見つめ合った。

——怪盗フレイアって、こうやって近くで見ると、さやかさんに似てる……。

智彦は股間を弄いじられながら、ここに監禁される直前に自分をフツた片想いの同級生の姿を脳裏に浮かべた。気の強そうなところも意外と優しく可愛いところもそっくりだ。

フレイアは軽く下唇を噛むと瞳をぎゅゅとつぶり手の動きを再開させた。先ほどまでの腫れ物に触るような弱々しい行為ではない。怪盗稼業をしているとは思えない柔らかな少女の指が絶妙なリズムと力加減で智彦のペニスを手コキする。

「あつ、あああつ……」

たまらず官能の声を上げていた。しかもイケナイことだとわかっていてもフレイアときやかを重ね合わせてしまう。少年が声を上げ始めると赤毛の女怪盗はぎゅゅと閉じていた瞳をうつすらと開けて、ちらちらと様子をうかがうように視線を向けてきた。この行為が恥ずかしくつてたまらないのだが、相手の反応もやはり気になるのだろう。多少興奮しているのか形のよい唇を僅かに開けて、軽くはあはあと息を弾ませている。薄く開いている瞳も潤んでいた。普段の凛々しい姿とのギャップのためか、そんなフレイアがたまらなく可愛く見える。こうなるとペニスで高まり続ける性欲の歯止めが利かなくなる。先端の切

れ込みには先走りの汁が滲み出し、大粒の珠を結ばせていた。

「くっ」

射精を耐えるために身を振った。童貞である智彦にとって、この状況は刺激が強すぎる。「あつ、ごめんなさい」

フレリアが反射的にそう言った。智彦が身体を振ったのが、自分の手による痛みのためだと考えたのだろう。

「あつ、ごめんなさい」、私その日は……。

さやかにフラられたときと同じセリフに、少年探偵の脳裏で異様な妄想が膨れ上がった。想像の中でペコンと頭を下げているさやかが、なぜか自分の股間に手を伸ばしペニスを掴む。ごめんなさい、と交際を断りながらそのしなやかな指で男根を抜き立てる。

そんな倒錯した光景が思い浮かんだ直後だった。

そそり立つペニスの先端で、大粒の珠を結んでいた我慢汁の表面張力が限界を越えて、たらりと弾けた。しなやかなフレリアの指に粘度の高い肉汁がぬちゅりと絡まり、絶妙なぬめりで肉竿が扱かれる。細く柔らかな少女の指の感触が、潤滑油がまぶされたことにより、ひっかかりがまるでない状態でペニスの全面をずるずると擦る。あまりの気持ちよさに奥歯を噛み締めた。そして耐え難い快感に「はくっ！」と声が漏れる。

——だめ！ イッチャウ!! 見られてるのにつ！

智彦は全身を力ませると五人の女怪盗が見守る中、フレイアの手の中で男根を震わせた。全身の中で渦巻いていた羞恥心や緊張感が全て官能に変換され、股間に集約されていく。思考が停止し目の前が真っ白になる。太い肉幹の中に通っている細い尿道の中を、一気に精液が駆け抜けていく。妄想世界のさやかと、現実世界の女怪盗フレイアが一つになり、その美貌に向けて、

どびゅっ！ どびゅびゅっ！ どびゅびゅびゅっ！

白濁の粘塊が弾け飛んだ。顔を真っ赤にしながら啞然としているフレイアのマスクに、智彦のザーメンがどぶどぶと着弾し続ける。初めて経験する異性の手による射精のために、今までの自慰では経験がないほど大量にザーメンが排出されていく。

「あつ、ふあつ、あつ、あつ……」

一度始まった牡欲の爆発を止めることなどできない。白い粘塊が連射され続け、啞然としている赤毛の女怪盗の頬や胸元にも直撃していく。

少年探偵を押さえつけている女怪盗たちは、それぞれ程度の差こそあれ智彦の射精に見入っていた。そんな異様な空気の中で、敵である女怪盗を恋する相手と重ね合わせながら智彦はその手の中で射精を続けた。フレイアは顔を真っ赤にしたまま思考を停止させたようにピクリとも動かず、脈動する男根を握り締め続けている。精液の噴出力が弱まり今では最後の噴出がそのままどろっと肉先から流れ、女怪盗の指を汚していた。



「ち、ちよつと待ってください！」

智彦はそう口走っていた。再度ラブリーシャドーの手刀が喉元に突きつけられるが、そんなことはお構いなしだ。瑠衣子が激しく腰を上下させる。もうイキそうだった。

「霧ヶ峰さんは……瑠衣子さんのことが……本当に好きなんですわね」

智彦はそれだけ言うのとミステリアスバニーの首裏に片手を回した。強引に引きつけて喘ぎ声が漏れないようにキスをする。興奮しきっている二人の舌は唇の重なる境界線でカチ合った。少年と人妻は下半身で結合したまま口でも深く一つになった。

『……ええ、瑠衣子さんは僕の全てです……瑠衣子を愛しています』

突然の智彦の質問に戸惑った感のある霧ヶ峰刑事は結局、生真面目にそう答える。

夫の言葉を聞いて人妻怪盗の身体がびぐつと硬直し、智彦の口内で踊り狂っていた舌が動きを止めた。夫以外のペニスを打ち込まれている女性器が、大量の愛液を垂れ流し、これ以上ないほど引き絞られる。瑠衣子は少年の頭をきつく抱き締めて、重ね合わせている唇がズレないように密着させると「んっー！ んんっー!!」と口内で絶叫した。

——ああつ、瑠衣子さんが、霧ヶ峰さんのセリフでイッチャって……。

智彦は初めて体感する女の絶頂に激しく興奮した。自分の上に乗りに密着している人妻の肉体が、びくびく痙攣する感触を堪能する。そして全身を息ませていた人妻が脱力し、くたつとしただれかかかってきた。捻じ切るように重ね合わせていた唇が解け、差し込まれて

いた舌がぬるんと抜かれる。

瑠衣子は白い頬を桜色に染めて瞳を閉じている。長い睫毛をふるふると震わせながら絶頂の余韻に浸っていた。そのほつくりと満ち足りた顔を見て智彦も限界に達する。

女怪盗の腰——太腿の付け根部分を両手で掴むと、下から激しく突き上げた。ぐったりしていた白い女体が、突然の突き上げにびぐつと強張る。余韻に浸っていた瞳が開かれる。瑠衣子の瞳は焦点が合わず涙で濡れたように潤みきっていた。智彦は歯止め利かなくなつた性衝動を爆発させながら人妻を激しく突き上げた。大量の愛液でぬるぬるになつた蜜壺の中で肉傘が一杯に張りきり、妖しく煽動し続ける腔壁を掻き出すように擦り上げる。瑠衣子は智彦が動きやすいように上半身を立ち上げた。激しい下からの突き上げに、大きなウサ耳が上下に揺れる。喘ぎ声を漏らさないように片手でその口元をきゅつと覆つた。

——うわあ、ク口チャッククのポーズだあ……。

先ほど瑠衣子が見せた可愛らしい姿を思い出して、少年探偵は仰け反つた。

「イツ、イクつ。イツちゃう！」思わずそう口走っていた。

『？ 旅行に今から行くんですか？』

夫と電話で会話しながら、その最愛の妻に突入を繰り返す。

『お土産期待しますよ。そうだなあ。瑠衣子さんが喜ぶようなものがないなあ。ちなみにどこにイクんです？』

「瑠衣子さん……瑠衣子さんの」

『? ああ、瑠衣子さんの喜ぶものですか? そうだなあ、なんでも喜ぶと思いますよ』

「中に……くっ……出るっ、出ちゃう!」

『? ひよつとして駅かなにかに急いで向かってるんですか? 電車が出そうだとか。失礼しました。もう電話を切りますね』

「刑事! 霧ヶ峰刑事! 刑事が一番大切な人は誰ですか!」

人妻との性交がもたらす快感に理性が吹き飛ばされていた。最高のフィニッシュを味わうために、極限の罪悪感を感じながら破戒の射精を行なうために、最低の質問を口走る。

『瑠衣子さんです』

霧ヶ峰刑事はきつぱりとそう答えた。その一点の迷いもない真摯な答えに全身がゾクゾクと粟立ち仰け反った。激しかった動きを止める。今まで生真面目に生きてきた智彦の胸中が強烈な背徳感で一杯となる。そしてそれが人妻怪盗とのセックスを、これ以上ない官能の領域に押し上げていた。心臓が早鐘のような鼓動を繰り返し、一脈ごとに罪悪感と快感が刻まれる。少年はがっちりとう瑠衣子の細いウエストを握り締め、その結合が万が一にも外れないように固定していた。何がなんでも中に出す。パートナーの妻を相手に中出しする。そんな不貞の意思が明確に込められた力の籠もりかただった。

「ああっ、ごめんなさい霧ヶ峰さん! 僕はああっ! 僕はあああっ!!」

人妻の膣壁に引き絞られている肉先が女体の最深部——子宮孔に密着する。先ほどイッたばかりの溜衣子が、口チャックのポーズをとったまま瞳を見開いて、薄い腹筋をびくびくと痙攣させ始めた。がくがくと膝立ちを崩し、僅かに浮かせていた腰を完全に少年と密着させる。そのため背徳の肉先が赤子が宿る子宮の入り口にぐふつとめり込んだ。

その圧迫感から溜衣子は瞳をギョツと閉じる。長い睫毛がふるふると震え、片手で覆われた口元からは、んんっんんっとな絶叫を呑み込む声が漏れ聞こえる。背筋はまるで稲妻の直撃を受けたようにびぐんと伸びきり、首は漏れそうになる官能の声を押し込めるために顎が胸元につきそうなほど折り曲げていた。掴んでいる腰がびくびくと痙攣し、豊かな乳房がふるふると震える。剥き出しの腹筋は、霧吹きで吹きつけたような汗で濡れ光り、薄い腹筋に囲まれた細いヘソが艶かしく左右にうねる。

人妻の肉体は再度絶頂していた。深く打ち込まれている男根が強烈に引き絞られる。溜衣子の最深部から溢れ続ける愛液の熱さが肉先を蕩かすようだ。絶品の女体が伝えてくる絶頂の振動が、その中心に埋め込んでいる男根に直接響いてくる。

——ああつ、溜衣子さん！ 溜衣子さん!!

剥き出しの牡粘膜と牝粘膜を激しく擦り合わせることでしか味わえないセックスの快感に、智彦は限界となった。少年の胸中で渦巻いている罪悪感と、結合している溜衣子の肉体がもたらす圧倒的な肉悦がすべて溶け合い、唯一の出口に向かって噴出する。

どびゅっ！ どびゅびゅっ！ どびゅびゅびゅっ！

瑠衣子の中に煮立った欲望の体液を注ぎ込んでいく。捜査のパートナーであり、親友でもある妻の子宮に、どぶどぶと煮え滾った性欲を吐き出していく。その背徳感に智彦の理性は焼き尽くされた。霧ヶ峰刑事の子供が宿る子宮にザーメンを流し込み、赤子が吸うべき豊かな乳房を握り締める。智彦は、ごめんさい、と呟きながら不貞の脈動を続けた。『こちらこそ、お急ぎのところすみませんでした』

何も知らない霧ヶ峰刑事が、電話を片手にペコペコと頭を下げている光景が思い浮かぶような申し訳ない口調でそれだけ言うと、でわでわ気をつけて、と言って電話が切れた。

その間も瑠衣子の肉体に背徳の性欲を吐き出し続けている。

電話が切れた直後、顎を引いて絶叫を耐えていたミステリアスバニーが仰け反った。

「ああっ！ 雅人さん！ 今夜はハンバーグを作って待ってます！」

瑠衣子はそれだけ言うと、まるで全身の筋肉から力が失われたようにかくんと少年の胸にのしかかってきた。智彦はすべてを人妻の中に吐き出すと、止めていた息を再開させる。少年と人妻は暫く身体を繋げたまま重なり合って、背徳の余韻に浸っていた。

——霧ヶ峰さんってハンバーグが好きなのか……。

心地よい人妻の重みを味わいながら、自分が拉致され監禁されていることも、恋するポニーテールの少女のことも忘れて、ぼんやりとそう思った。



彦の舌に絡まった。異常な状況でお互いの気持ちを確認し合った二人は、激しく舌を踊らせてお互いの口腔粘膜を食った。

——ああつ、さやかさん！ さやかさん！

智彦の全身に歓喜の快感が進る。それまでペニスの根元を緩急つけて引き絞り、射精を許さなかつたりオジーナの指が、相思相愛のカップルを祝福するように、その縛めを解く。ミステリアスバニーが舌を絡めている乳首がこれ以上ないほど硬く尖り、クイーンダイヤが舌を入れている肛門が激しく収縮する。

「んふっ！ んっふふっ！」

今まで散々射精を堰止められて、溜まりに溜まったザーメンが、キャプテンジュエルが舐め転がしている陰囊から、ラブリーシャドーが舐め回している肉竿の中を通って、レディパンサーが啜えている肉先に向かう。今まで経験したことがないほど濃厚な性欲の塊が、牡の快感を全身に撒き散らしながら、細い尿道を一気に貫いた。

どぶゆっ！

恋する同級生とねちっこいディープリキスを続けながら、他の女の口内へ思うさま性欲を吐き出した。リオジーナと若葉を相手にした3Pセックス、瑠衣子と綾乃のフェラチオ&パイズリアナル舐め、そしてエデルとのアナルセックス。本来ならばすでに三回は射精している。その分だけ凝縮されているのか、尿道を通っていく精液の感覚が明らかにいつも



と違っていた。固形物のように粘度が高く、そして太い。まるで濃厚なヨーグルトを弾き出しているような感覚に、強烈な快感が全身を駆け巡る。

どぶぶっ！ どぶぶっ！ どりゅどびゅびゅっ！

脈動を続ける男根はいつまでも濃縮ザーメンを排出し、リオジーナの口内をすぐに一杯にしてしまう。ペニスをしっかり啜えている牝豹の唇から精液が吹きこぼれ、褐色の顎から精液が滴る。いつまでも切れない白い糸を引きながら、ねっとり下と下に落ちていく。

「ああん。凄くドロドロですう」

溢れ出たザーメンに、若葉とエデルが舌を伸ばした。愛らしい桃色の肉片が、白濁色に汚された褐色の美貌を舐め清める。若葉が唇と男性器の結合部分からどぶどぶと溢れ出る精液を舐め取り、エデルが牝豹の顎から垂れ流れるザーメンを捉える。それぞれ生まれた国の違う三人の女怪盗が、少年が吐き出し続ける白濁の粘液を争うように舐め取っていく。

—— ああつ、やつと射精できたよお……。

少年が堰止められていた精液をすべて吐き出し終わると、股間の前に跪いていたレディパンサー、ラプリーシャドー、キャプテンジュエルの三人が立ち上がった。乳首を舐めていたミステリアスバニーも離れる。

智彦はさやかと唇を重ねたまま、両腕で彼女を抱き締めた。フレイアもつられて少年の背中に両手を回す。二人はお互いをきつく抱き締めた。

「ちよつと、いつまでご主人様のお尻を舐めてるのよ」

キャプテンジュエルにそう言われ、クイーンダイヤはレイパンサーに首ねつこを掴まれて智彦の臀部から引き離された。深く嵌まり込んでいた女教師の舌が、生徒のアナルからぬるんと抜ける。それから改めて、綾乃は完全に二人の世界に入っている智彦とさやかを見て嘔然とした。

「ち、ちよつと待ってよ！ 次こそは私の番よ！」

「まあまあ、ここは一つ大人になつて」

と最年少のラプリーシャドーに諭される。

「綾乃ちゃんは、もう少し空気を讀んだほうがいいかもね」

と、最も空気を讀まないミステリアスバーニーに注意された。

「そんなあ……」

知的な美貌に情けない表情を浮かべて、クイーンダイヤはがつくりと項垂れた。

※

「ああつ、さやかさん……」

智彦は仰向けになつたさやかを中心にした男根をあてがうと、ゆつくり腰を落としていった。恋する相手との二度目の結合は、周りを五人の女怪盗に囲まれてのものになつた。

「ああんもう！ こうなつたら、私のほうが坊やにブチ込んじゃうわよ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睡月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫
[小説・さかき傘 / 挿絵・天海雪乃]



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです
[小説・酒井仁 / 挿絵・にのこ]



女幹部メル様の
セカイ征服計画!
[小説・高岡智空 / 挿絵・鈴眼依縫]

2010
8月下旬
発売予定!!



悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!

既刊LINEUP ● 仙聖字聖姫ノブナガツ ①～③
● 灼爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になりに語る愚者の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③
● プリンセスリパース!! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の姫騎士がDMICに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②
● 呪詛喰らい脚!カースイーター!
● 魔海少女ルレイエール

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

VALKYRIE



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!